様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２５７８０５０７

研究課題名（和文）若者のキャリアと「場所の感覚」についての社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological study of the youth career and their "senses of place"

研究代表者
中島　ゆり（NAKAJIMA, Yuri）

お茶の水女子大学・リーディング大学院推進センター・特任アソシエイトフェロー

研究者番号：７０５８１７７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、若者がキャリアを形成する上で、教育、仕事、生活の場所をどのように考えているかに着目し、個人のキャリアと地域移動の選択において教育・経済機会に還元され得ない要因を探求した。本研究では九州地方A県の出身者にインタビュー調査を実施し、かれらがなぜA県に住み続けているのか、またはなぜA県を離れたのかを語ってもらうことで、かれらが「地元」やほかの土地に対してどのような感覚をもっているのか、それが親の経験、学歴、地域移動経験によってどのように異なって形成されているのかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on how Japanese young people choose the locations of education, work, and life, and explores how the choices of people's career and the possibility of geographic mobility are intertwined in the social and cultural dynamics, which could not reduce to the disparity of educational and occupational opportunities between cities and rural areas, among prefectures. I conducted the interview data from young people from a prefecture in the Kyushu area. I asked them to talk about why they had stayed in their hometown, or why they had left the hometown. From their narratives, I explored what senses of place on their hometown and other locations they had, and how differently the senses of place are formed by their parents' experiences, their academic attainment, and the experiences of geographic mobility.

研究分野：教育社会学

キーワード：若者のキャリア　地域移動　場所の感覚

１．研究開始当初の背景

本研究の問題関心は、交通の便がかなりよくなった現代、積極的に地域を移動し社会移動を図ろうとする者がいる一方で、なぜ教育機会も職業機会も少ない地域にとどまったり戻ったりする者がいるのだろうか、というものである。1990 年代の経済不況以降、若者にとって学校から職業への移行は円滑なものではなくなり、成人期への移行が難しくなってきている。大都市圏と比較した地方の高等教育進学者の少なさと求人の少なさは、地方の教育機会と職業機会の欠如として問題視されている。とくに経済不況は地域労働市場に打撃を与え、若者は大都市圏に移動して職を得なければならないように見える。しかし一方で、教育機会、職業機会が少ない地域にとどまったり戻ったりする者がいる。本研究の目的は、若者の地域移動とキャリア選択において、教育・経済機会に還元され得ない社会的、文化的要因を探究することである。

本研究は九州地方 A 県に着目するが、問題関心と地域選択の理由は主に下記のマクロとミクロの研究成果２つに依拠している。まず、①大学生のキャリア展望と就職活動に関する実態調査（2005 年）（独立行政法人 労働政策研究・研修機構が実施。著者は調査研究メンバーとして参加）は全国の大学四年生 18,509 人を対象とし大学進学と就職（活動）の実態を明らかにした調査であるが、その中で調査者は高校所在地（　地元）の全国 11 つのエリア（北海道、東北、関東、甲信越、北陸、中部、近畿、中国、四国、九州、沖縄）を比較し、大学進学時と就職時の地域移動の傾向がエリアと性別によって異なることを明らかにした。この量的研究で分かったマクロな傾向をふまえ、②九州出身の四年制大学卒業者 35 人に対するインタビュー調査（2011-2012 年）では、個人のキャリアと地域の選択理由というミクロな部分に着目して研究をおこなった。①の調査研究で就職時地域移動の男女差が大きかった九州地方を対象とし、進学時、就職時に大学や職業を選択する際、場所についてどのように考えていたかを 35 人の大卒者（20～30 代）にインタビューで明らかにした。この研究では、生まれ育った場所（とくに都会か否か）、就いた職業、ジェンダーが場所についての考え方(「場所の感覚」) に影響しており、逆にそのような「場所の感覚」が将来的なキャリア展望にも影響を与えることを示唆した。また、「ふるさと」への憧憬とノスタルジアは男性に親和的である一方、女性は親の面倒を見るという現実的な理由で地元に戻るという語りがみられた。

この②の研究では生まれ育った場所が都会か否かによって「場所の感覚」と「ふるさと」への考え方が異なることを明らかにしたが、特定の地域の文化、人、景観がどのように「場所の感覚」を育むのか、それが階層や性別によってどのように異なって形成されるかについては課題として残された。九州地方 A 県出身者にUターン希望者と「ふるさと」への憧憬をかかえる者が多かったことから、本研究では A 県出身者に注目し、A 県の地域文化、人、景観について対象者がどのように意味づけ、それがどのように「場所の感覚」と関連しているのかについて焦点化して研究することにした。

また、これまでの著者の研究では調査対象者を大卒者に限定していたが、本研究では大卒者のみならず高校卒業者、短大・専門学校卒業者も対象に加え、学歴と階層差にも着目した。調査対象者は世代を統制するため 20～30 代の若者に限定した。

２．研究の目的

本研究の目的は、若者のキャリアを「場所の感覚」と地域移動という視点から研究することにある。具体的には、若者がキャリアを形成する上で、教育、仕事、生活の場所をどのように考えているかに着目し、個人の地域移動とキャリア選択において教育・経済機会に還元され得ない社会的、文化的要因を探究することである。

この問題関心にもとづき本研究では若者が自らのキャリアを形成する上で「場所（place）」をどのように考えているのかという視点から研究する。「場所」には文化、人、景観などの要因が含まれる。教育を受けたり働いたり住んだりする場所をどのように考えるか、そして、自らの地元をどのように考えるかによって、キャリア展開が大きく異なると考えられる。にもかかわらず若者のキャリア研究においては地域の機会構造以外の要因についてあまり着目されてこなかった。このような「場所の感覚（sense of place）」は主として地理学者が用いる概念であるが、Giddens（1994）や Hall（1990）などの社会学者や文化理論家もその重要性を指摘している。「場所の感覚」は地域、階層、ジェンダーのダイナミクスの中で形作られ、個人の場所アイデンティティを形作るものである。

本研究は若者がキャリアを形成する上での「場所の感覚」を明らかにすることで、若者のキャリア研究に新たな視座を与える

ものである。
調査者は、2011 年度から九州出身（生まれてから高校までの大部分を九州で育った者）の四年制大学卒業者 35 名の若者にインタビュー調査を実施し、かれらが教育、仕事、生活の場所をどのように考え、生まれ育った場所（ふるさと）をどのように意味づけ、そして、そのことが自らのキャリアにどのように影響しているのかについての調査研究をおこなった。
本研究は、これまで実施してきた研究を焦点化して補うことを目的とし、１）地域を九州地方 A 県に限定することで、より具体的な地域文化や景観に対する考え方にも焦点をあて、２）大卒者のみならず高校卒業者、短大・専門学校卒業者も対象に加えることで学歴と階層差の分析を加える。

３．研究の方法
本研究は、人々の主観的な世界を明らかにするため、質的インタビュー調査を実施した。調査協力者は、九州地方 A 県出身の若者（20～40 代）40 人である。調査協力者には、四年制大学卒業者のほか、短期大学卒業者、専門学校卒業者、高等学校卒業者のいずれも含んでいる。
調査協力者のサンプリングは、まず A 県のイベントに参加し、そこで知り合った人たちに調査の内容を説明し、協力してくれるかどうか、また、協力してくれる人が周りにいるかどうかを尋ねた。協力してくれると回答してくれた場合には、e-mail または Facebook のメッセージ機能を用いて調査日時を相談した。調査後は協力してもらった者たちに協力してくれそうな知人がいる場合には紹介してもらい、つぎの調査協力者を求めた。
インタビューは、喫茶店、ファミリーレストラン、ファストフード店、職場のうち、調査協力者の都合のよい場所で行った。インタビュー時間は、60～90 分程度であった。
調査協力者には、これまでの教育・職業歴・地域移動歴とその理由、キャリア展望、将来居住する（希望する）予定の場所とその理由、趣味、好きな場所、地元（「ふるさと」）やその他の場所への愛着について語ってもらった。

４．研究成果
（１）若者の「場所の感覚」とその学歴差、階層差、ジェンダー差の検討。
近代化とグローバル化によって地域性は薄れ、社会や文化が画一化しているという指摘がある一方、グローバルな地域移動はエリート層によってもたらされ、そうでない人々は地方に取り残されることで、ますます格差が拡大しているとの警鐘を鳴らす研究者もいる（Bauman1998 など）。日本では戦前戦後ともに高学歴層は大都市圏へ移動するが、低学歴層は地元にとどまる傾向にあることが指摘されている（新谷 2002 など）。また、地域移動はジェンダーによる相違が指摘されており、男性は移動への親和性が高いと言われる。
これらの先行研究をふまえ、本研究は、若者のキャリア上の地域移動の前提として、そもそも場所への考え方（「場所の感覚」）がどのようなものであるのかを明らかにし、また、それが学歴、階層、ジェンダーのダイナミクスの中でどのように形作られているかを検討した。
たとえば、A 県に住み続ける女性は出るのが「怖い」と表現した。同様に、別の女性も東京へ行くのが「怖い」と述べ、今度、旅行で東京に行くのだが、不安だということも話した。これは男性からは全く聞かれない表現であった。このような女性の怯えの感覚は、結果的に、地元を離れることを拒ませるものとなる。
別の事例として、ある男性は A 県には「何でもあるので出る必要がない」と述べた。この男性は九州内の他県でも働いたことのある者であったが、A 県の地元に戻り暮らしていた。怯えの感覚と同様、このような「何でもある」という感覚もまた地元を離れることを拒ませていた。
A 県の外に出ることを怖がったり、あるいは、何でもあると述べたりした者たちは、進学で他県に出ることはなく、また、家族・親戚も A 県の地元に暮らしていた。
かれらとは異なり、地元に貢献したいという積極的な理由を述べて A 県に暮らす男性は、また、別の感覚をもっていると言える。この男性は大学進学で関東圏に移動したが、地元に戻って自営業を営んでいる。そして、この街を活性化させたいと述べた。
このように、地元、そして別の土地をどのように考えるかと、その後のキャリアの場所と仕事内容と働き方は絡み合っているが、キャリア形成において、このような場所についての感覚はこれまで問われることはなかった。

（２）地元への考え方（「場所の感覚」）はその地域の文化、人、景観と関連して形成されている。
調査対象とした A 県のある街には、A 県

外から少なくない若者が移動して住んでいる。かれらが移動してきたのは、この地域のコミュニティに属して仕事をしたいと考えているからである。本研究では、このようなA県への移動者との交流が盛んなコミュニティにおいて、県外出身者に感化される形で、A県出身者もまたそのコミュニティへ貢献し始める様が聞かれた。

たとえば、A県の観光業に携わる男性は、自分よりも、他県から移動してきた同僚男性の方がA県に愛着を持っていると感じ、自分のよりも熱心に観光業に取り組んでいることを不思議がった。彼にとってはその街の観光資源は生まれたときから当たり前のものとして存在しており、特段、魅力を感じてはいない様であった。

このような他県からの移住者との交流の多いA県のある街については、遊びに行くのは良いが住むのは抵抗があると語った者たちもいた。都市とは異なった形で少なくない移住者が暮らす街は、かれらにとって独特な様相だと感じられていた。

すなわち、ある街の様相は絶対的な評価がなされるものではなく、好ましく思っている者もいれば、いない者もおり、誰にとっても住みやすい街として存在しているわけではなかった。

（３）研究の示唆と今後の課題

地域活性化の政策として、地元に若者を残留させたいと考える場合、その若者の中には出るのが怖いといった消極的な理由によってとどまる者がいるという可能性を見過ごしてはならない。

また、地元の人間が、その土地の魅力を知らず、外からの移住者によって気づかされるという現実は重要である。移住者との交流は若者のキャリアにとっても、また、街にとっても、重視されるべきであろう。しかし、他方で、このような交流のある街がいつも人々に受け入れられているわけでもないという点も考慮するべき点である。

本研究の知見は、地域教育や町おこし、地域の活性化を促す政策に対し、単に教育機会や職業機会を広げて若者を地域にとどまらせるという以外の文化的な側面についての示唆を与えるものである。

本研究をふまえ、今後の研究においては、A県に移動してきた若者に焦点を当て、かれらのキャリア展望と場所の感覚を明らかにし、また、A県出身者とA県への移動者の感覚が交差し、変容していく様をA県への移住者の視点から明らかにしていく。

参考文献

新谷周平，2002,「ストリートダンスからフリーターへー進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』第 71 集，pp. 151-170.

Bauman, Z. 1998, Globalization: The human consequences. Cambridge: UK Polity Press.

Giddens, A. 1994, Living in post-transitional society. In U. Beck, A. Giddens,S. Lash (Eds.), Reflexive modernizatio: Politics, and aesthetics in the modern social order (pp. 56-109). Cambridge: Polity Press.

Hall, S. 1990, Cultural identity and diaspora. In J. Rutherford（Ed.）, Identity: Community, culture, difference, pp. 222-237. London: Lawrence and Wishart.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

①Yuri Nakajima, June 4 to 6, 2014, Issues of Japanese University Career Services in Students’ Geographic Mobility, IAEVG International Conference（ポスター発表）, Quebec(Canada)

② Yuri Nakajima, November 20, 2014, High-school Students' Decisions on Geographic Mobility and Career in Japan, the 4th Conference of the Asia-Pacific Educational Research Association (APERA)（口頭発表）, The Hong Kong Institute of Education.

６．研究組織

(1)研究代表者

中島　ゆり（NAKAJIMA, Yuri）

お茶の水女子大学・リーディング大学院推進センター・特任アソシエイトフェロー

研究者番号：70581776